

2007. 8.

自選

五十首

小林幸子



こばやし・ゆきこ 一九四五年奈良生まれ。
一九七二年「ヤママユ」入会、前登志夫に
師事。九四年「塔」入会、選者。「晶」編集
発行人。歌集『夏の陽』『枇杷のひかり』
『あまあつみ』『千年紀』『シラクス』。歌
書『子午線の旅人・前登志夫の風景』。

ひとゆゑの杉のやうなる明るさにゆふづく水をつつと渡りき

あきくさのさみしき流れまきあげて夢の端より野火となりゆく

海の創、凍てし硝子のむかうがは齒列のやうにひと佇ちをりし

熱に喘ぐ吾子の鬨の外の外にゐて怵ふるに永きながき夏至の日

従きて来し少年の口笛が新緑の森に没りゆくわれより迅く

あやまちてわれに来し子か夏の陽の輝く空へいま離れゆけり

垂直に立ちてぞ吾子は焼かれるむまつ青な空體たいに充ちつつ

わが父とわが少年のめぐり遇ふ秋の銀河のふぶけるあたり

目瞑りてほうと煙を吐きたまふ母よこの世の春のむらさき

〈髪かみの長いお母さん〉なれば借りられて運動會の少女と走る

「夏の陽」

「枇杷のひかり」

ほのほのと五人家族でありしかな　お花畑の驛に昏れつつ
星ぞらに空壇あまた打ち砕き朝ほほ糸みてゐしわが母よ

ゆふぐれは刃物らふそく銀の針萬屋の燈がみづに點れり

少女期に遭ひたるもののひとつにて救世観音は蜥蜴に肖たり

きみの聲耳に降りつつやさしかり　こゑはひかりを分けて來ること

光源としてひとりの死者を抱きをり山のくぼみの秋草のなか

山鳥は黙ふかくをりみなぎれる六萬六千ポルトのうへに

忘れみづ春野にひかりわれは欲し子のひとふさのやはらかな髪

ボンヌフもミラボー橋も肋骨　昏きセーヌを流れてみれば

兩戸開け硝子戸をあけ仏壇の扉をあけて吾子に雪景色

いまひとりの死者憶ふゆゑ家族なり並びて雪の蔵王をあふぐ

つぎつぎと降り來るリフト掬まへて兩拭くひとがどうぞと言ひぬ

海潮の滴をたりてゆくひとを海人安曇とぞはるけかりけり

亡きひとの四捨五入して数へらる白梅の花咲きはじめたり

朝光の一步に踏みしかたつむり夢のなかにて踏みかへしたり

くらやみに髪をあみつつ手に触れしなにももの尾か編みこみにけり

戸口まで夜を歩いてきたやうなダリアの根株土間に坐れり

寄り添へる青鬼集落十二軒雪ふりながら繭となりゆく

さやさやと春の息して石臼のなかにみどりご寝かされてをり

こもりくのわがふるさととは千年を伊勢と大和の押し合ふところ

「あまあつみ」

「千年紀」

子どもどころ家族でよく百人一首をしした。正月などには隣りの家と合同で、親類が集まればそこでも百人一首大会だった。自然に多くの歌を覚え、韻律が身に刻み込まれていったのだろう。だが自分で作ることはなかった。

短歌に出会ったのは一九七二年である。そのころ、奈良県の橿原市に住んでいた。近鉄線の岡寺駅から田甫の道を歩いて七、八分の新しい団地である。集落の外れの丘の上には益田の岩船という巨大な石があった。二歳の長男を連れ、乳母車に長女をのせて、れんげや菜の花が咲く道を歩きながら、つぶやきがふと歌になった。その短歌らしきものを新聞の「大和歌壇」に投稿してみたのが作歌の初めである。当時の選者は前登志夫だった。

「帰るとは幻ならむ麦の香の熟るる谷間にいくたびか問ふ」という『子午線の繭』の一首を読んだのもそのころだ。私の故郷は奈良県室生村である。母方の祖母の出身地であるその村に生まれ、幼年時を過ごした。親類はあっても疎開者の

移送車に乗るサンダルの爪先を十四歳の少年といふ

あさぞらにつぐみの群れをばつと撒く腕さへみゆるやうな快晴

日陰より日なたへこどもゆきかへり切株の上に椿ふえゆく

白梅のあえかなひかり乱さずに往きかふものを死者とよぶべし

おほきなる月が口まで降りてきてトンネルのなかもあかるいよ

青空にたれか躓きささなみの波のわらひの広がりゆけり

剥がしてもはがしても赤い夕焼けよつひにほとりと腕を落とせり

人群れに押されつつ視る立つたまま子を産みさうな土偶の女

ふかぶかと日傘をさしてあゆみゆく時間の空き地のやうなこの村

白き道をゆらめきながらからつぼのバスが来たりてわれを拾ひぬ

かたくりのうつむく花を覗くときひとは野原にうすくなるなり

湯に水をいれ、水に湯を入れ人間の始めと終りに沐浴なせり

カライジャンギ戦争の村となづけられたるその村に数へきれない戦争が降る

枇杷の花ひつそりと咲く停留所に待ちつつバスは死んだと思ふ

朝光あさかげのなかに蕾をひらきたり百合は世界の四隅にむきて

ざふきんをうらがへしたかかへさなかつたか 窓いつぱいの夕焼け

戦争を消せばしづかなテレビなり膝抱へるわたしをうつす

バスカードさし入れながらコードモデスと子供がいふをきけばかなしき

シチリアのはじめなる地のシラクーサ海のほとりの廃墟をあゆむ

秋の日のアリストテレスの墓のへを走る蜥蜴の背のあをみどり

「シラクーサ」

私たち一家にとって帰る家はない。それでも私の記憶の初めはその山里にある。

「帰るとは幻ならむ」という言問いがふかく心にしみたのである。それから半年ほどして、東京に移ることになった。

第一歌集『夏の陽』を出したのは一九八六年である。その間にいろいろなことがあった。

『夏の陽』は、十四歳で逝った息子と、後を追うように亡くなった父母の歌があふれていて読み返すのは今も苦しい。だが、このつらい時期に私は短歌と二度目の出会いをしたと思う。歌によって支えられていた歲月。

帰ることのできない故郷と、死者である息子と父母、不在のものたちを歌によってちかぢかと感じることができた。これまで五冊の歌集を通して、私がつたいつづけてきたのはそれだけだったのかもしれない。

けれどもこのごろふと思う。どこにもない故郷や、たいせつな死者を、私が抱いていたのではなく、私が抱きとられつつまわっていたのかもしれない。——なべては歌というはるかな時空でのことであるのだが。